

妙満寺梵鐘に関する坪井良平書状

寺 西 貞 弘

はじめに

小稿が論じようとする書状は、道成寺（和歌山県日高川町鐘巻）に所蔵されているものである。その内容は、京都妙満寺所蔵の梵鐘について、坪井良平氏が言及された書状の写しである。当該梵鐘は、その銘文から、本来紀州道成寺の梵鐘であったことが広く知られている。

書状の発給者である坪井良平氏は、大著『日本の梵鐘』をものされ、日本における梵鐘研究の第一人者であることは周知の事実である^①。しかも、その研究業績は、今も色あせることなく、梵鐘研究における必読の書となっている^②。その略歴を、著書の著者紹介で見ると、およそ次のようになっている。

一八九七年大阪生まれ。一九一四年大倉商業学校卒業。大阪鉄工所・大洋海運勤務。東京考古古学会等を活動の中心として、歴史考古学の一つの課題としての梵鐘の研究に精力的に取り組む。一九七五～七八年文化財保護審議会専門委員。一九八四年没。

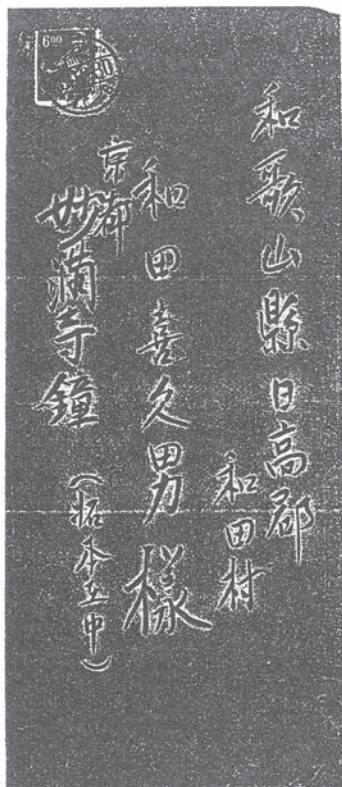
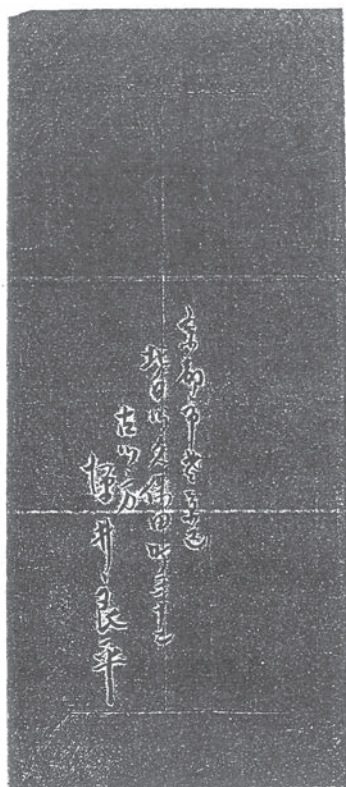
すなわち、梵鐘研究の権威である坪井氏が、元道成寺の梵鐘である妙

満寺の梵鐘を論じておられるのである。ちなみに、前掲の大著『日本の梵鐘』においては、この梵鐘のことには言及されていない。それゆえに、本書状を紹介する意義は十分にあるだろう。

小稿は、先ず所蔵者である道成寺（小野俊成住職）の許可を得て、本書状を正確に翻刻したい。そのうえで、坪井氏の梵鐘に関する所見を紹介したい。さらに、若干の問題点を指摘し、今後の本梵鐘研究への資料を提供したい。

一 坪井書状の翻刻

本書状は、本文が収められていたと思われる封筒の表書・裏書の写しと、原稿用紙四枚に自筆で記された本文の写しである。翻刻に際しては、封筒の表書・裏書・原稿用紙の順で翻刻を行った。とくに、原稿用紙に記された文章に関しては、現状の行替えに忠実に行った。また、一部旧字を新字に改めた箇所がある。さらに、筆者が句読点を追加した箇所もある。封筒の表裏及び原稿用紙の写真を付したので、翻刻の可否を検討



いただきたい。なお、本文内にイラスト図があるが、翻刻では、その位置を(図)として示したが、その実態については、写真版を参照されたい。

【翻刻】

「(封筒表書)

和歌山県日高郡

和田村

和田喜久男 様

京都 妙満寺鐘 (拓本在中)

※切手の料金は六円、消印の日付は「26 10 30」とあり。」

「(封筒裏書)

京都市左京区

北白川久保田町三十二

古川方

坪井良平

拓本が到着しました由、粗拓で失礼です。爰に妙満寺鐘のスケッチを全封致しますから、併而御笑納願ひます。この鐘が徳川時代の製作であろうと、推定します理由は、	(一) 乳の形状が全く徳川時代のものであること。	(二) 上帯が四条の太い紐から出来てゐることも、亦徳川時代のもの以外に殆ど見られないこと。	(三) 臺座の模様も亦徳川時代のものであること。	(四) 袈裟襷の横の紐が太く、縦の紐が細いのも、亦徳川時代の慣用的手段であること。	等であります。	しかし、この鐘が旧鐘を模造したであらうと思はれる点もあります。	(一) 竜頭が徳川時代のものとは違ひ、南北朝頃のものと言つてもいゝほど古風であること、即ち徳川時代のものとは	云つてもいゝほど古風であること、即ち徳川時代のものとは	云つてもいゝほど古風であること、即ち徳川時代のものとは	云つてもいゝほど古風であること、即ち徳川時代のものとは	云つてもいゝほど古風であること、即ち徳川時代のものとは	云つてもいゝほど古風であること、即ち徳川時代のものとは	云つてもいゝほど古風であること、即ち徳川時代のものとは	云つてもいゝほど古風であること、即ち徳川時代のものとは	云つてもいゝほど古風であること、即ち徳川時代のものとは	云つてもいゝほど古風であること、即ち徳川時代のものとは	云つてもいゝほど古風であること、即ち徳川時代のものとは	云つてもいゝほど古風であること、即ち徳川時代のものとは	云つてもいゝほど古風であること、即ち徳川時代のものとは	云つてもいゝほど古風であること、即ち徳川時代のものとは	云つてもいゝほど古風であること、即ち徳川時代のものとは	云つてもいゝほど古風であること、即ち徳川時代のものとは
--	--------------------------	---	--------------------------	---	---------	---------------------------------	--	-----------------------------	-----------------------------	-----------------------------	-----------------------------	-----------------------------	-----------------------------	-----------------------------	-----------------------------	-----------------------------	-----------------------------	-----------------------------	-----------------------------	-----------------------------	-----------------------------	-----------------------------

(本文)

拓本が到着しました由、粗拓で失礼です。爰に妙満寺鐘

のスケッチを全封致しますから、併而御笑納願ひます。この

鐘が徳川時代の製作であろうと、推定します理由は、

(一) 乳の形状が全く徳川時代のものであること。

(二) 上帯が四条の太い紐から出来てゐることも、亦徳川時

代のもの以外に殆ど見られないこと。

(三) 臺座の模様も亦徳川時代のものであること。

(四) 袈裟襷の横の紐が太く、縦の紐が細いのも、亦徳

川時代の慣用的手段であること。

等であります。

しかし、この鐘が旧鐘を模造したであらうと思

はれる点もあります。

(一) 竜頭が徳川時代のものとは違ひ、南北朝頃のもの

言つてもいゝほど古風であること、即ち徳川時代のものとは



と共に、古い摩耗した竜頭を見て、そのま
 模倣したことを、最も有力に示唆してゐ
 ると思はれます。

(三) 乳が四段四列であるのも、もとの鐘が四
 段四列であったのを示してゐると思はれ
 ます。たゞ乳の形状は、制作年代のものによつ
 て違ったものでせう。

(四) 図示してゐませんが、笠形には亀裂の如
 き溝があつて、一寸見るとお餅のひからびた
 やうな感じですが。それは決して技術の拙劣
 から出来たものではなく、鋳型に亀裂の溝をほつて
 おいて、意識的に作ったものであります。
 これも恐らく旧鐘にあつた亀裂をうつしたも
 のではないかと思はれます。

二 書状の大意

坪井氏は、本梵鐘を詳細に観察し、乳の形状・上帯に描かれた紐の形状・台座の模様・袈裟襷の形状が、近世（徳川時代）の梵鐘の特徴を表していると考えられる。その上で、本梵鐘は、本来の梵鐘ではなく、それを模倣した梵鐘であると断定される。

坪井氏は、古今東西の梵鐘を博覧され、その著書『日本の梵鐘』の中で、各時代の梵鐘の特徴を簡潔に整理しておられる。そして、本梵鐘に關する考察は、まさしくその考察に基づいているものと思われる。まして、浅学の私が、その考察をうんぬんすることはできない。

その一方で、本梵鐘の竜頭の形状が南北朝期の形態に類似していることを指摘される。また、竜頭の鉤にかかる部分の摩擦が見られるが、ここには鑄型の継目が確認できることを指摘される。すなわち、竜頭の摩擦部分を正確に型撮りして、竜頭を模造したが、その状態で鐘楼に吊るされたことは一度もなかったのだとされる。鑄型の継目がそのままに残っているのであれば、この考察結果には従わなくてはならないだろう。

また、乳の間の乳を四段四列に配列している状態は、本来の梵鐘の配列であろうとされる。さらに、笠の部分に亀裂があるが、これも本来の梵鐘にあった亀裂をそのまま型撮りして模倣したのであると推察される。

以上の諸点から、本梵鐘はたしかに近世に模造したものであるが、本来の梵鐘を忠実に模倣していると指摘される。そして、刻印されている銘文については、「文章だけか字体までもかは断定しかねますが」との但

し書きを付して、本来の梵鐘の銘文を写したものでありと判断しておられる。

現在、私たちが目にしている妙満寺の梵鐘が、後代（徳川時代Ⅱ近世）の模造であるという説は、坪井氏が初めて述べられたものではない。昭和初期に、高野辰之氏がすでに述べておられる^③。しかし、高野氏の説は万壽丸から数えて一六世の子孫で、幕末維新期の人である瀬見善水の言説に依拠したものである。高野氏は、万壽丸以後の系譜の検証もなっていないばかりか、本来の梵鐘と模造の梵鐘との関係や異同についても、全く触れておられない。その点で、坪井氏の考察は、極めて学術的であると評することができるだろう。

坪井氏の考察の中で、私が注目したいのは、「笠形には亀裂の如き溝」が存在するという点である。『都名所図会』は、妙満寺の項目に道成寺の鐘という項目を立てて、この梵鐘のことを紹介している。その中で、「初は竜頭の下にひびきありしが、次第に癒えて今は平らかなり」と記している^④。ここに記されている「竜頭の下にひびき」こそが、坪井氏の指摘された「笠の亀裂」であると考えられる。

しかし、『都名所図会』には、その瑕は本来あったものであるが、「次第に癒えて今は平らかなり」と明記しているのである。『都名所図会』の出版は安永九年（一七八〇）である。そして、その時点で亀裂が平らかになっていたというのであれば、近世に模造した梵鐘にその亀裂を型撮りすることはできないことになる。したがって、この梵鐘が模造されたのは、少なくとも安永九年よりかなり以前ということになるだろう。

しかも、模造した梵鐘に瑕があり、『都名所図会』の執筆者が見た梵鐘

の瑕が「平らか」であるということは、模造の梵鐘と本来の梵鐘は、安永九年段階で妙満寺に併存していたことになるだろう。それでは、模造の梵鐘は、どのような経緯で铸造されたのであろうか。『都名所図会』には次のような興味ある記述がある。

遂に天正十六年五月に紀州新宮某、当寺に寄附す、然れども瑾あつて音響遠く至らずゆゑ、この鐘を鑄改めんとて碎かんとするに、大いに振動し、鐘より火焰出づる、衆僧これに驚いてこの事を止めて、新に一鐘を鑄たり、すなはちこの鐘は堂内に蔵む、

妙満寺に奉納された梵鐘には、瑕があつて音響が響かなかつたため、奉納された梵鐘を碎いて改鑄しようとしたが、「大いに振動し、鐘より火焰出」したため、改鑄を断念して、「新に一鐘を鑄たり」というのである。この新たに鑄造した梵鐘こそが、現在私たちが目にしている模造された梵鐘と考えることができるだろう。

梵鐘がひとりでに振動したり、火焰を放つなどということは、誠に不自然なことであろうが、何らかの事情があつて碎くことを断念したのであろう。そのため、別に梵鐘を鑄造したというのである。しかも、本来の梵鐘は「堂内に蔵む」と記されており、『都名所図会』が出版された安永九年には、間違いなく妙満寺には本来の梵鐘と模造された梵鐘が併存していたのである。

模造の梵鐘が、安永九年以前の何時頃鑄造されたのかはわからない。しかし、新旧の梵鐘が確かに併存していたのである。それゆえに、本来の梵鐘を型撮りし、竜頭の形状や笠の瑕をそのままに模造することができたのであろう。このように考えると、模造の梵鐘の銘文も、坪井氏が

推定されたように、そのままに写されたものと判断できるかもしれない。すなわち、坪井氏の考察は、『都名所図会』の記述が正確であることを裏付けるものであるといえるだろう。

さらに、本来の梵鐘は堂内に収蔵されてしまったのである。そして、模造の梵鐘が衆目にさらされることになったのである。やがて、堂内に収蔵された本来の梵鐘が忘れ去られ、衆目にさらされた模造の梵鐘が、あたかも本来の梵鐘であるかのように認識されるようになったのだろう。

三 若干の問題点

これまで、本来の梵鐘と江戸時代に模造された梵鐘の関係を、坪井氏の考察と『都名所図会』の記述から考察してきた。しかし、これまでの考察によつて、二つの大きな疑問が生じることになる。まず第一点は、本来の梵鐘が現に存在していたにもかかわらず、模造の梵鐘を鑄造する必要がなにゆえあつたのであろうか。第二点は、竜頭や笠の瑕を型撮りしてまでも正確に模造しているにもかかわらず、乳の形状などをなにより型撮りもせず、江戸時代の状態で鑄造したのであろうか。

第一点について、『都名所図会』は、模造の梵鐘鑄造の理由を、本来の鐘に瑕があつたため、音響が遠くまで届かなかつたからであるとしている。しかし、坪井氏の考察によつて模造の梵鐘は、どうやら一度も鐘樓に吊るされてはいなかつたのである。このことから、模造の梵鐘は衝いて音を聞かせるために、鑄造されたのではないと考えなくてはならないだろう。

第二点については、竜頭や笠の瑕を忠実に型撮りして、本来の梵鐘を正確に模倣しようとする姿勢が看取できる。すなわち、本来の梵鐘は、模造の梵鐘を鑄造するために、型撮りする必要があるため、碎ききることができなかつたのである。それにもかかわらず、乳の間の乳の状態や上帯・袈裟襷などの状況を、型撮りもせずに、江戸時代の様式で鑄造してしまっているのである。これらことから、模造の梵鐘は、本来の梵鐘を忠実に模倣しようとしたが、乳の間・上帯・袈裟襷などは、型撮りしようにも、それができない状況であつたとしか考えられない。

『都名所図会』の記述によると、本来の梵鐘が妙満寺に奉納されたのは、新宮の某によつて、天正一六年（一五八八）五月のこととしている。妙満寺への奉納経緯については、別に詳細に考察することにするが、まさしく戦国時代のさなかに、道成寺から本来の梵鐘が略奪され、略奪した武將の手によつて数年後に妙満寺に奉納されたのである。それでは、その武將は、なにゆえに道成寺の梵鐘を略奪したのであるうか。

寺社の梵鐘は鑄銅製であるため、鑄直して大砲などの武器製作に用いられることが多かつた。略奪した武將も、武器等への鑄直しを目論んで略奪したのではないかと思われる。そして、その略奪した梵鐘を、碎いて武器などへの鑄直しを試みたのであろう。しかし、その梵鐘が有名な道成寺の梵鐘であることに気付いて梵鐘を砕くことを止めて、妙満寺に奉納したのではないだろうか。しかし、その時点で乳の間や上帯・袈裟襷などの部分は、型撮りができないほどに破損していたものと考えられる。それゆえに、それらの部分は、江戸時代の様式で復元せざるを得なかつたのであろう。

一方、奉納された妙満寺では、それが有名な道成寺の梵鐘であることを見れば、参詣者たちに拝観させたことであろう^⑥。しかし、その状態は見るに堪えないほどに激しく損傷していたのである。有名な道成寺の梵鐘がそのような状態であることを多くの人々に見せれば、梵鐘を損傷させた張本人が、妙満寺ではなからうかとさえ思う人も出現したことであらう。万一にも、そのような疑惑を抱かれることは、仏家である妙満寺には絶対に耐えられるものではなかつただろう。その一方で、歴史的にも有名な道成寺の鐘を参詣者に拝観させないわけにもいかないのである。そこで、参詣者に拝観させるための模造の梵鐘の必要性を痛感し、妙満寺は模造の梵鐘の鑄造に踏み切つたものと思われる。

模造の梵鐘の鑄造は、衝いて音を聞かせるためではなく、参詣者に拝観させるためであつた。それゆえ、竜頭を型撮りして正確に復元しながらも、一度も鐘樓に吊るされることがなかつた理由もそこにあつたのだろう。このように考えれば、先に提示した二つの問題を整合的に理解することができるだろう。

最後に、坪井氏の書状発給の前後について考察しておきたい。本書状の受給者は伊藤喜久男氏であることは、封筒表書にも原稿用紙にも明記されている。伊藤氏は、元道成寺の梵鐘である妙満寺の梵鐘にこのほか興味を持ち、坪井氏と書状のやり取りをしている。さらに、その書状の写しが道成寺に収められている。これらの点から、彼は道成寺の世話人等の関係者ではなかつたかと思われる。

ただし、本書状の封筒と原稿用紙は、着せ替えが行われているようである。すなわち、原稿用紙が収められていたとする封筒は、本来坪井氏

の自筆の原稿用紙が収納されていたものではないと思われる。その根拠について以下述べておきたい。

封筒の表書の消印は、「26 10 30」と押されている。坪井氏の生没年を勘案すれば、これは昭和二六年（一九五二）一月二六日であると判断することができる^⑦。それに対して、原稿用紙本文の末尾には「十一月三日」と坪井氏自身が明記している。坪井氏が一月三日に記した書状を入れた封筒に、郵便局がそれよりも以前の消印を押すことはありえないことであろう。したがって、着せ替えがあつたと判断しなくてはならないだろう。

それでは、この着せ替えにはどのような意味があるのだろうか。原稿用紙本文の書き出しは、「拓本が到着しました由、粗拓で失礼です」である。これは、自分が採拓した拓本が和田氏の下に届いたらしいということを知った坪井氏が、粗っぽい拓本で失礼しましたとへりくだっているのである。

このことから、和田氏は拓本を受け取ったが、その書状に妙満寺の梵鐘が江戸時代の模造であると簡潔に述べられていたことがわかる。そのことに驚いた和田氏は、即座に坪井氏に書状を出して、その詳しい根拠を確認したのである。本書状は、その和田氏の書状に対する坪井氏の回答であり、拓本郵送の書状が一信とすれば、本書状は二信に当たるといえるだろう。本書状の末尾に、坪井氏が「前文いひ足りないところを補足しました」と記していることから、この推定に誤りはないだろう。一信と二信は、内容から見て非常に近い時間において発給されたものと思われる。したがって、二信も昭和二六年に発給されたものと考ええるこ

とができるだろう。

このように考えると、封筒表書の消印の下に「拓本在中」という墨書があることに注目しなくてはならない。現在原稿用紙本文が収納されていたとされる封筒は、坪井氏がこの書状以前に、和田氏に拓本を郵送した際の封筒であつたと考えて間違いないだろう。道成寺に確認したところ、坪井氏の書状は現在これ一通しか存在しないとのことであつた^⑧。

おそらく、坪井氏から送られた拓本が、坪井氏の採拓したもので、それを和田氏に郵送した際の封筒であろう。それに付されていた書状も、和田氏は道成寺に取めた可能性があるかもしれない。しかし、和田氏にしてみれば、一信が妙満寺の梵鐘が江戸時代の模造の梵鐘であることを簡潔に述べた内容であつたため、より詳細に所見を述べている二信だけを、道成寺に知らせればよいと判断したのかもしれない。

おわりに

小稿は、妙満寺の梵鐘（元道成寺所蔵）に関する坪井良平氏の考察を記した書状を正確に翻刻した。そして、その大意を読み取った。さらに、若干の問題点について、私見を述べた。

坪井氏は、妙満寺の梵鐘を、乳の間の乳の形状や上帯・袈裟襷の状況から、江戸時代に鑄造された模造の梵鐘であろうと結論付けられた。その一方で、竜頭の形状や笠の瑕などが正確に型撮りされており、南北朝の様式を正確にとどめていると評価された。また、竜頭は型撮りされて正確に模倣されているが、そこに鑄型の継目が確認できることから、

一度も鐘樓に吊るされてはいなかっただろうと推定された。

一方、私は『都名所図会』の記述から、妙満寺の梵鐘は、安永九年現在、本来の梵鐘と模造の梵鐘が、妙満寺に併存していたことを述べた。このことから、私は二つの問題点を提起した。まず第一点は、本来の鐘が存在するにもかかわらず、模造の鐘を鑄造する必要がなにもゆえであったのかということである。そして、第二点は、竜頭や笠の瑕を型撮りしてまで正確に模倣しているにもかかわらず、乳の間の乳などをなにもゆえ江戸時代の様式で復元してしまったのかということである。

第一点については、道成寺の梵鐘が天正年間に戦国武将によって略奪され、武器への転用を目論んで激しく損傷を受けたのではないかと推定した。その後妙満寺に奉納されたが、参詣者に拝観させるには耐えられないほどに損傷していたため、妙満寺によって模造の梵鐘が鑄造されたと考えた。本来の梵鐘は、模造の梵鐘を鑄造するために、正確な型撮りをするため、壊されることなくその後も妙満寺堂内に保存されたと考えた。

第二点については、竜頭などは本来の梵鐘が原形をとどめていたため、正確に復元したのだろうと考えた。一方、乳の間の乳などは、激しく損傷していたため、江戸時代の様式で復元せざるを得なかったと考えた。なお、最後に現在道成寺に伝来している坪井氏の書状と封筒の写しは、明らかに着せ替えがあったことを提言した。

坪井氏の本書状によって、妙満寺の梵鐘銘は江戸時代の模造であることが明らかになった。なお、関西大学博物館には、本来本山彦一コレクションであった妙満寺の鐘の拓本が所蔵されている。この拓本と模造さ

れた梵鐘の刻印とを目視調査したところ、模造の梵鐘の拓本であると判断することができる。それでは、この銘文は本来の梵鐘の銘文とどのような関係にあるのだろうか。これに関して、坪井氏はその銘文は、内容的には本来の梵鐘の銘を正確に伝えていてのではないかと判断しておられるが、その根拠を明示しておられない。このことを含めて、本来の梵鐘が、道成寺から略奪され、妙満寺に奉納された経緯などについて、別に考察を行いたいと考えている。

注

- ① 坪井良平『日本の梵鐘』（角川書店、一九七〇）参照。
- ② 坪井氏の業績が今も評価されていることは、坪井氏の著書『日本の梵鐘』が、吉川弘文館から、二〇一八年に新装再版されたことが、その証左といえるだろう。なお、後掲の坪井良平氏の経歴は、本書の著者略歴による。
- ③ 高野辰之「道成寺芸術の展開」（『史学雑誌』三八―三、一九二七）参照。
- ④ 『都名所図会』は、『新修京都叢書』六（臨川書店、一九六八）によった。
- ⑤ 『紀伊続風土記』は、「天正年中兵乱の時、掘出し軍用に充て」ようにしてと記している。
- ⑥ 『都名所図会』の妙満寺の項目に、別に道成寺の鐘の項目を立てていることから、妙満寺所蔵の梵鐘が、有名な道成寺の梵鐘であることを喧伝していた証左であろう。

⑦ 前述のとおり、坪井良平氏の生年は、明治三〇年であり、没年は昭和五九年であることから、坪井氏の書状の消印は昭和年号と判断する以外にないだろう。

- ⑧ 道成寺小野俊成任職のご教示による。
- ⑨ 考古学等資料室「金石文拓本資料」〔関西大学考古学等資料室紀要〕三
号、一九八六、参照。